

---

## 7 I. R. A.

---

1996年6月15日、マンチェスターの商店街の中心で、激しい爆発がおきた。アイルランド共和軍（IRA）によってトラックの荷台に仕掛けられた爆薬が、爆発したのである。土曜日の午前中で、200人以上がけがをした。直径20メートル、深さ8メートルの穴が地面にあいたというから、ものすごい爆発である。北アイルランドをめぐる和平会談が進行する中で、爆破だけに、イギリスの人々に与えた失望と怒りは、はかりしれない。

午前9時43分、グラナダテレビの交換台に、爆破予告の電話があった。IRAは、いつも事前に通知してある暗号を述べた上で、メッセージを伝える。今回の予告も、間違いなくIRAからのものであった。1時間以内にマンチェスターの中心地に停まっているトラックが爆発するという内容である。10時2分に警察は問題のトラックを発見し、一帯からの買い物客と従業員の避難を進めた。一方、軍隊はロボットを使って爆発の防止に努めたが、爆発を止めることはできなかった。ものすごい爆発のわりに死者が出なかったのは、避難が速やかに行われたためであるが、都市部ではいまや恒例の行事になりつつある避難騒ぎに、半信半疑の人もいたようである。被害総額は300億円にのぼると試算されている。

マスコミは、さっそく激しい非難のキャンペーンを始めた。いつもはスキャンダルの暴露に熱心なタブロイド紙も、この時ばかりは何ページも特集を組んで報道している。デイリー・メールのひとこま漫画は、傷ついた白い鳩に食らいつく猛禽に乗った、シン・フェイン党のアダムス党首が、「もちろん今回の事件が私たちの平和を求める姿勢に影響を与えるものではありません」と語る姿を描いている。シン・フェイン党は、アイルランドの統一を主張する政党で、IRAと表裏の関係にあるとされている。先ごろのアイルランドの総選挙で、シン・フェイン党は、10数パーセントの得票を得た。

イギリスの人たちの、IRAに対する怒りはよくわかる。北アイルランド問題が、経済悪化のひとつの原因とされているし、それに加えて狂牛病問題である。牛肉はヨーロッパが輸入を禁止しており、農家の打撃は大きい。また、

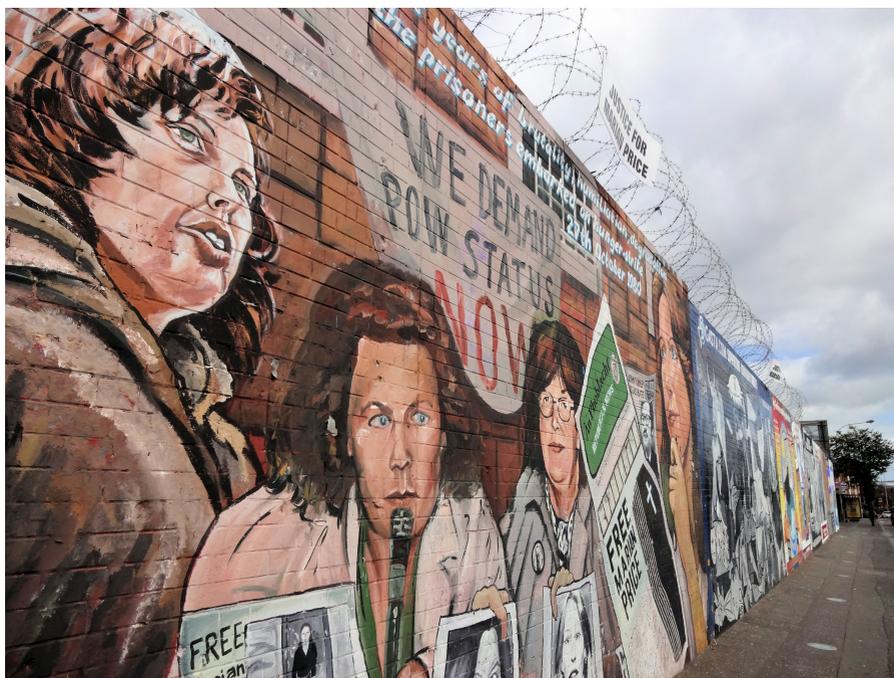


爆発を報じるタブロイド紙 (1996年6月17日付)

イギリスの人たちは、北アイルランド問題の背後にアメリカがおり、影で糸を引いていると感じているようだ。しかし、イギリスの人たちは、本当に白い鳩なのだろうか。

もともとアイルランドには、独自の文化が栄えた。「学者と聖者の島」といわれるように、学問が栄え、聖パトリックをはじめとする著名なキリスト教徒を輩出した。それが、1801年にイギリスに併合され、1921年に、北アイルランドを残して、ようやく現在の共和国の範囲が一定の独立を回復したのである。北アイルランドは、すでに200年近くイギリスの統治下にあり、たしかに少なからぬ数の人々がイギリスの傘下にとどまることを希望している。こうなってしまうと、残念ながら、もはや、しこりの残らない解決策など、あろうはずがない。他の多くの民族紛争と同じように、アイルランド問題も、根深く、悲しい闘いである。

しかし、イギリスの人々の立場を白い鳩に描かれてしまうと、両者の言い分



壁に描かれた北アイルランドの人々の願い (2012年9月5日撮影)

を努めて平等に理解しようとする気持ちに、いささかの揺らぎがでてしまう。アダムス党首は、「マンチェスターの爆破は起こってほしくなかった。しかし、同じように、イギリス軍がアイルランドの6州の街角にいてほしくはない。差別も望まないし、イギリスの支配を希望しない。私たちの島の分断も望んでいない。」と述べている。平和への道のりは遠いと感じざるをえない。

1996 新納泉 著作権フリー

【付記】北アイルランド紛争は、このエッセーが書かれた2年後の1998年に、ひとまず和平合意の達成をみた。イギリスもアイルランドもEUの一員となり、イギリスとアイルランドの国境の意味が薄れてきたことも、その背景にあっただろう。しかし、2020年1月末でイギリスがEUから離脱し、国境の役割が再浮上してきた。紛争が再燃しないことを願うばかりである。